研究ノート

# マラナオ語物語『バラプラガン』の社会像
## ―ミンダナオにおける草の根イスラーム政治思想の探求―

# An Image of Society in a Maranao Story, *Baraperangan* : An Inquiry into the Grass-root Islamic Political Thought in Mindanao

川島　緑
KAWASHIMA Midori

Local religious leaders such as teachers of Islamic schools and the village *Imam* play a key role in mobilizing the Muslim masses, by providing them with a paradigm of social order and change. This paradigm also reflects the aspirations and grievances of the masses, because it is meant to appeal to them.

Therefore, in order to understand the dynamism of an Islamic political movement, it is important to inquire into the local religious leaders' perception of the existing social order, and their initiative to change it.

In this light, this study examines the way the local *Ulama* in the Lanao area perceived the contemporary situation in Mindanao, and how they tried to change it during the critical period from the late 1960s to the beginning of the 1970s. The primary source of this study is a publication of theirs during the period, a popular Islamic story entitled *Baraperangan*. It is a Maranao (local language of the area) version of a Malay story entitled, *The Story of Muhammad Hanafiya,* in which the hero fights against oppressors and non-believers with the help of his supernatural power and God, and establishes a just rule

based on Islam.

By analyzing its text and the social and political context of its publication, I argue that the local *Ulama* attempted to connect the existing popular Islamic beliefs with a modern political ideology of Islamism.

## はじめに

南部フィリピン、ミンダナオ島とスールー諸島のムスリム地域では、1970年代初頭以来、南部フィリピンの分離独立、もしくは高度の自治を求める武装闘争が続けられてきた。この運動のイデオロギーやそれを支えた政治思想に関しては、モロ民族解放戦線中央指導部の発行した文書や、初代中央委員長ヌル・ミスアリ（Nur Misuari)を初めとする中央指導部幹部の発言にもとづいて研究が行われてきた。これらの先行研究によって、この運動を支えた思想には二つの異なる流れ、すなわち、(1) 世俗的な公教育を受けた学生や若手知識人を中心とし、民族自決を掲げる世俗主義的性格の強いモロ民族主義思想、(2) 中東留学生を中心とするウラマー（イスラーム知識人）を中心とし、イスラーム国家建設をめざす急進的イスラーム政治思想が存在することが指摘されてきた[(1)]。

1970－80年代、モロ民族解放武装闘争は南部フィリピン・イスラーム地域の大半を席巻した。中でもムスリムが集中しているミンダナオ島中部の南・北ラナオ州とマギンダナオ州は、モロ民族解放武装闘争の一大拠点となり、この地域の一般のムスリム住民の多くも彼らを正統性のある革命運動として認めてきた。この運動は、草の根レベルではどのような思想に支えられてきたのだろうか。運動組織中央の指導者が掲げた「民族自決」、「民族解放」、「イスラーム国家樹立」などの観念は、末端で武装闘争を担った人々にどのように理解されていたのだろうか。

この問いに対し、実証研究にもとづいて答えを出すことは大変むずかしい。なぜなら、末端におけるモロ民族革命運動への動員活動は、国家権力の監視を避けるため、多くの場合、口頭で行われ、たとえ政治宣伝文書が作成された場合でも、それらはすぐに破壊されたり、紛争の過程で紛失した場合が多く、資料の面で大きな制約があるからである。

そうした中で、この点に手がかりを与えてくれる資料として、筆者は、ムスリム大衆の間に流通した現地語出版物に注目し、ミンダナオ島南ラナオ州を中心として個人や図書館を訪ねて資料調査を行なってきた。それらの中で特に重要だと思われるのは、モロ民族革命運動が本格的に開始される直前期の1960年代末から1970年代初めにかけて、南ラナオ州マラウィ市とその周辺のイスラーム学校教師のグループが発行した大衆向けイスラーム物語 (2) である。これらは、この地方のムスリム住民の母語であるマラナオ語を用い、アラビア文字で表記（ジャウィ表記 (3)）され、手動式の謄写版印刷機で刷られた簡素な手作りの冊子である。本稿はその中で、マラナオの人々に親しまれてきた有名な物語、バラプラガンをとりあげ、ミンダナオのイスラーム政治思想研究にとってのその重要性を指摘し、刊行をめぐる政治・社会状況を検討した上で、この世における統治のあり方について述べた部分を訳出してその内容を紹介する。そして、それにもとづいて、物語の中で理想的な統治として描かれている「イスラームの裁きに基づく社会」という観念を検討する。それを通じて、モロ民族革命直前期にあたる1970年前後の時期に、地元のイスラーム指導者がムスリム民衆に何を伝えようとし、それをどのようなことばで表現していたかという点を、多少なりとも明らかにし、今後の研究の資に供することとしたい。

## 1. 大衆的イスラーム物語の重要性

バラプラガンは、マラナオ社会で世代を越えて語り継がれてきた口承文学である。題名のバラプラガン（Baraperngan）という語は、「（アッラーの道に則した）戦い」を意味する (4)。これは7世紀後半のアラブ世界を舞台とし、第4代カリフ、アリーの孫、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤを主人公とする物語で、その内容は史実からは大きくかけ離れたものである (5)。物語の大まかな筋書きは以下のとおりである。

> ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、圧政者ヤジード王によって殺された異母兄弟、アミール・ハサンとアミール・フサインの死に対して復讐し、囚われの身のその家族を解放するために、武勇の才と神秘的な力を用い、兄弟たちとともにヤジード王の軍勢と戦う。激しい戦いが長い間続くが、預言者ムハンマドとアッラーの助けを得

て勝利を治める。彼はフサインの息子、ザイナル・アビディンを救い出し、ムスリムの指導者の地位に就任させ、彼を補佐してダマスカスで理想的な統治を行なう。だが、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは戦いに夢中になりすぎ、生き残った不信心者を一人残らず殺そうとしたため、アッラーによって岩穴に閉じ込められてしまう。彼は今でもそこで眠っているが、「最後の時代」が到来するときに目覚め、巨人の姿をした悪魔ダジャールと戦う。アッラーはムハンマド・アリ・ハナフィーヤを助けるためにイーサ（イエス・キリスト）を遣わし、二人はダジャールを退治して全ムスリムを救うことになっている。

バラプラガンは、マレー語物語『ムハンマド・ハナフィーヤ物語(Hikayat Muhammad Hanafiyyah)』の翻訳に起源を持つ。『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』は『スジャラ・ムラユ（マレー年代記）(Sejarah Melayu)』にも言及されている有名な物語であり、マレー語圏に広く普及している。『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』については、L．ブラケルがその内容や起源について研究を行なっており、それによると、この物語は14世紀半ばのペルシア語のテキストに由来し、おそらく、それからあまり時を経ない時期に、スマトラ島北部でマレー語に翻訳され、その後、マレー語圏に広まったとされる（[Brakel 1975 : 56]）。

では、マレー語の『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』は、いつごろ、どのようにしてミンダナオ島に伝わったのだろうか。この点に関しては、バラプラガンに関する先行研究が不在であり、筆者も現段階では明確なことはわからない。だが、筆者が聞き取りを行った50歳代以上のマラナオの人々は、彼らの祖父母や両親の世代から聞いた話として、19世紀末のスペイン軍との戦いや、20世紀初頭のアメリカ軍との戦いの時期に、バラプラガンは特に盛んに語られたという。村落社会のあるイスラーム指導者の名前を挙げて、マレー語の原本を所有していたという人もいた。ミンダナオ島とマレー語圏は、古くから経済活動やイスラーム布教活動を通じて活発な交流があり、また、ミンダナオからのマッカ（メッカ）巡礼はマレー語圏を中継地として行なわれていた。これらのことから、ミンダナオを来訪したマレー語圏出身のイスラーム指導者や商人、マレー語圏と行き来して

いたミンダナオの商人、マッカ巡礼の途中、マレー語圏に滞在したミンダナオからの巡礼者などが、この物語を口承伝承として、あるいは、写本や刊本の形でもたらした可能性が高いと考えられる。伝来の時期は特定できていない。

また、20世紀半ば頃まで、マラナオ社会では、マレー語のイスラーム書がイスラーム教育に用いられていた。このことから、マレー語の素養を持つマラナオ人イスラーム指導者が、マレー語原文をマラナオ語に訳して語り、それが広まった可能性が高い。

このように、マレー語原本のマラナオ社会への伝来や翻訳の経緯については、不明な点が多い。だが、筆者の主要な関心は、起源の追及ではなく、バラプラガンという物語の政治的、社会的機能にある。そこで、成立の経緯についての議論はこのくらいにしておき、バラプラガンについて、その政治的、社会的機能との関連において重要だと思われる特徴を検討することにしたい。

第一の特徴として、バラプラガンは、ムスリム大衆へのイスラーム知識の普及という社会的機能を有していた点を指摘できる。マラナオ社会において、近代的イスラーム学校（マドラサ）が普及し、広く一般の人々が、直接、クルアーン（コーラン）やその注釈書を読んでイスラームの知識を得ることができるようになったのは、20世紀半ば以降のことである。それ以前は、母語でわかりやすく語られるイスラーム物語が、民衆がイスラームに関する知識を得る上で重要な役割を果たしていた。パラプラガンもそのひとつとである。

第二に、これらのイスラーム物語の中でも、バラプラガンは、植民地軍に対する武装抵抗運動と密接なかかわりを持って語られてきたという特色を持つ。筆者が聞き取りを行なった60歳代から80歳代までの数人のマラナオの人々は、彼らの両親の世代からの言い伝えとして、19世紀末のスペイン軍との戦いや20世紀初頭のアメリカ軍との戦いの時期、バラプラガンは特に盛んに語られたと述べている。

第三点として、感傷的な場面がふんだんにあり、情緒によって聞き手の感性に強く訴えかけるという特色がある。大衆へのイスラーム教育という役割を持つとはいっても、それは教訓一辺倒の退屈な説教ではなく、娯楽的な要素を持つ物語であった。バラプラガンの中では、為政者の狡猾さ

と残虐さ、哀切な親子の別れ、出陣する若武者の凛々しさ、血湧き肉踊る合戦、壮絶な殉教、殉教者を迎え入れる天国の豪華さ、天女のなまめかしさ、主人公の怪力などが、平易な散文の話し言葉で生き生きと語られた。そのため、聞き手はあたかもそれが目の前で繰り広げられている出来事のように感じながら、物語の世界に引き込まれ、登場人物と一緒に一喜一憂した[(6)]。すなわち、バラプラガンの語りは、聞き手の感情を揺さぶり、民衆に対して大きな動員力を持っていた。さらにバラプラガンは、娯楽性を持つため、聞き手である民衆の好みや関心を意識して語られた。そのため、特定の時代状況で語られたバラプラガンには、その時代の民衆の願望や不満、怒りが反映されていたとみることができる。従って、バラプラガンのあるヴァージョンが語られた特定の時代の社会・政治状況を考えながら、そのテキストを検討することにより、その時代、その社会において流通していたものの見方や考え方とともに、そこに滲み出ている民衆の期待や感情を読みとることができるのではないかと考えられる。本稿は、このような試みの出発点を確認する作業として位置付けられ、バラプラガンの研究に先鞭をつけるものという意義を持つ。

## 2.『バラプラガン』発行の背景と経緯

謄写版刷り『バラプラガン』は、南ラナオ州の州都、マラウィ市にあるカーミロル・イスラーム学院の教員グループによって、1969年1月から1972年7月までの2年半の期間に、全7巻のシリーズとして刊行された[(7)]。彼らは、一体、どのような動機にもとづいて『バラプラガン』を刊行したのだろうか。この点を、当時フィリピン・ムスリム社会が置かれていた状況から検討してみよう。

1950年代半ばから60年代にかけて、ムスリム国会議員を中心とする一握りのムスリム・エリートは、中東諸国の政治指導者に接近し、その支援を得て中東のイスラーム教育機関へのフィリピン・ムスリム学生の派遣、中東からのイスラーム教師の招聘などの教育面での交流事業を実施した。同時に彼らは、フィリピンのムスリムの全国組織であるフィリピン・ムスリム協会を強化するとともに、各種のイスラーム団体を新たに設立した。([川島1989][Majul 1985])。

ラナオ地方の一部のウラマーは、こうした動きに積極的に参加し、そ

れによってフィリピンのイスラーム運動を発展させる戦略をとった。マッカ留学を経て、1956年、マラウィ市にシューラ評議会学校を設立したアフマド・バシール(Ahmad Bashier)はその代表的な例である。彼はエジプトからのイスラーム教師を招いてアラビア語教育に力を入れ、イスラーム諸国からの支援を得て積極的にイスラーム教育を拡大し、ラナオ地方各地に分校を設立した（[川島2004c]）。

これに対し、1930年代にラナオ地方で最初の近代的イスラーム学校として設立されたカーミロル・イスラーム学院の創設者ムハンマド・シディク (Muhammad Siddiq) は、世俗的なフィリピン国家の政治権力とはかかわらないという立場を堅持し、アフマド・バシルのような積極的な対外活動を行わず、旧来の教育を続けたため、新興のシューラ評議会学院に学生を奪われ、かつての名声には翳りがさしていた ([川島2004a])。

一方、地域社会のリーダーの援助に支えられて運営され、経営規模も小さいカーミロル・イスラーム学院は、地域社会が抱える問題に対して、より敏感にならざるをえないという事情を抱えていた。シューラ評議会学校の教員の多くが中東留学ウラマーであったのに対し、1960年代のカーミロル・イスラーム学院教員の多くは、現地で教育を受けたウラマー（以後「現地教育ウラマー」と呼ぶ）であった。中東留学ウラマーがマラナオ語よりアラビア語で執筆する国際派の新興エリート知識人であったのに対し、現地教育ウラマーは、マラナオ語の世界に生きているこの地域のムスリム大衆の精神世界に、より近いところに位置していたということができよう。

同じ1950－60年代、フィリピン・ムスリム社会は、フィリピン政府が実施した国民統合政策とそれに起因する社会変化を通じて、フィリピンの全国的な政治・経済・文化のシステムにより深く組み込まれていった。特に1960年代には、マス・メディアを通じて非イスラーム的な文化がムスリム大衆の間に急速に浸透し、フィリピンのウラマーはそれに対して危機感を抱いていた。マラウィ市にも女性のヌードや性的描写を満載したタガログ語漫画本が氾濫し、ムスリムの間にも広まっていた。ウラマーは、これらの漫画本は、性的欲望を煽り、それによって人間を堕落させると考え、ムスリムがそれを読むのをやめさせたいと考えていた。この問題について、カーミロル・イスラーム学院の教師グループが考え出した対抗策は、イス

ラームの教えやアラブ起源の物語をマラナオ語でわかりやすく述べた本を発行し、イスラームの規範に反しない読み物として、同学院生やその他、ムスリム一般大衆に提供することであった（Abdulgani氏インタビュー）。謄写版印刷『バラプラガン』の発行もその一環として行われた。

『バラプラガン』が刊行された1969年から72年の時期は、ミンダナオ島中部のウラマーが大きな危機感を抱き、しかもそれが時とともに強まっていった時期であった。その最も直接的な要因は、キリスト教徒有力政治家の私兵集団、「イラガ(Ilaga)」によるムスリム民間人虐殺の頻発であった。イラガとは、フィリピン中部からのキリスト教徒入植民のことばであるビサヤ系言語で鼠を意味し、宗教的な秘密の儀礼を持ち、殺害した相手の耳を切り取るなど残虐な行為を行なうことで、フィリピン・ムスリム社会で悪名をとどろかせていた。これに対抗し、ムスリム有力者や住民も武装集団を組織し、キリスト教徒民間人に報復目的の襲撃を行なった。これらの虐殺事件は、個別にその詳細を分析すると、地元の有力政治家間の利害対立に起因することが多かったが、両者とも宗教シンボルを用いて戦ったため、この時期のミンダナオ中部は、あたかもキリスト教徒とムスリムの宗教戦争が起きているかのような外観を呈していた（[George 1980][川島 2003]）。

また、虐殺事件に関して、フィリピンの軍や警察がキリスト教徒側に加担する傾向が顕著であったため、ムスリム指導者は、マルコス政権、地元キリスト教徒政治家、軍・警察が結託し、イラガを用いてムスリムを抹殺しようとしていると訴え、この見方はウラマーやムスリム民衆の多くにも共有された。そうした中で、1969年には、ラナオ地方出身ムスリム有力政治家のイニシアティブにより、将来の武装闘争を視野に入れて、マレーシアで秘密裡にムスリム青年の軍事訓練が開始された。ウラマーの多くは、フィリピンのムスリム社会は存亡の危機にあり、イラガとマルコス政権の軍隊による攻撃からムスリム社会を防衛するために戦う必要があると考えた。『バラプラガン』の発行は、このようにフィリピン・ムスリム社会に危機感が広がり、極度に緊張が高まっていった時期に符合している。このことから、カーミロル・イスラーム学院の教員グループは、イスラームを守るための戦いの重要性を説くことを動機として、『バラプラガン』を刊行したと考えられる。

『バラプラガン』刊行の経緯の詳細は、不明の部分が多い。だが、大きな流れとしては、マレー語の底本を、マレー語が堪能な地元のイスラーム知識人がマラナオ語に翻訳し、それをカーミロル・イスラーム学院教員や同学院出身者が筆写し、謄写版印刷と製本を行ったことはほぼ確実である[6]。発行部数についてのデータはないが、他の同様な謄写版刷りイスラーム書の発行部数が500部から1000部の間であったことから、おそらくそれらとあまり変わらない部数が発行されたものと推測される。

流通に関しても詳細は不明だが、おそらく他の同種の出版物と同様に、カーミロル・イスラーム学院の学生や、学院を訪れた一般の人々に、1ペソ程度での価格で販売されたものと考えられる。マラウィ市から湖を隔てた対岸にあるビニダヤン町で、地元のイマームを通じて同書を手に入れたという例も存在する。また、筆者が利用したピーター・ガウィン記念研究センター図書館のコレクションのなかの『バラプラガン』は、おそらく1970年代に同図書館学芸員がマラウィ市の市場で購入したものと言われている。これらのことから、『バラプラガン』は、いくつかの複数のルートによってマラナオ社会に流通し、地元のイスラーム指導者がその流通において重要な役割を果たしていたとみることができる。

## 3.『バラプラガン』の構成

『バラプラガン』は、内容の点でⅠからⅣの4つの部分に大きく分けられる。物語の概要を把握することを目的として、以下にその構成を示す。各部分の見出しは、内容に則して筆者が適宜つけたものである。＊は現物未確認の部分で、その内容は前後関係や関連資料からの類推したものである。（　）内は、該当する巻とページを示す。

Ⅰ．アッラーの道に則した戦いの尊さ（第1巻全体）
　信者の義務としてのアッラーの道に則した戦いの説明、来世で殉教者が受取る報い、天国や天女の素晴らしさ

Ⅱ．預言者ムハンマドの子孫の受難（第2巻初め～第3巻7ページ）
　Ⅱ-1．ハサンとフサインの死の予告
　Ⅱ-2．バギンダ・アリとムアーウィア王の戦い、バギンダ・アリの暗殺

II-3．ヤジードの結婚話、彼のハサン、フサインに対する怒り
II-4．ヤジードの教唆によりハサンの妻が夫を毒殺
II-5．ヤジード、フサインをマディーナから誘き出す
II-6．渇きに苦しむ子どもたち
II-7．カルバラの合戦
　II-7-a．フサインの従者たちの戦いぶりと殉教
　II-7-b．フサインの幼い息子、アリ·アクバルの戦いと殉教
　II-7-c．フサインからムハンマド・アリ・ハナフィーヤへの手紙
　II-7-d．フサインの殉教
　II-7-e．天使、預言者、玉座の降臨、天体の運行の異変
II-8．フサインの家族、ダマスカスに連行され、囚われの身となる

III．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤのヤジードへの復讐の戦い（第3巻7ページ～第5巻終わり）
III-1．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、フサイン一行殉教の知らせを受ける
III-2．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとその兄弟対ヤジード軍の戦い
III-3．ウマール・アリ、ヤジード軍に捕まるが、アルキスにより救出
III-4．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ軍の勝利、マディーナの統治
III-5．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、夢で預言者ムハンマドのお告げを聞く
III-6．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ軍、フサインの家族救出のため、ダマスカスに進撃
III-7．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤの兄弟、ヤジードに加勢する四か国に遠征
III-8．ダマスカス近郊での、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ軍対ヤジード軍の戦い
　III-8-a．ヤジードの二人の息子、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ側に寝返る
　III-8-b．兄弟たちの四カ国での戦いと勝利、ダマスカスへの帰還
　III-8-c．ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、右腕を切り落とされ、

ヤジード軍に捕まる

III-8-d. イブラヒム、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤを救出

III-8-e. ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、預言者ムハンマドの夢のお告げにより、右腕を回復

III-8-f. 回復した右腕は超人的な力を持ち、ヤジード軍は敗退

III-8-g. フサインの魂の助けにより、ヤジードは炎の泉に落ちて焼け死ぬ

III-9. ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、フサインの家族を救出

III-10. フサインの息子、ザイナル・アビディンがムスリムの指導者に即位

III-11. ザイナル・アビディン統治下のダマスカスの繁栄

III-12. ムハンマド・アリ・ハナフィーヤの兄弟、故国へ帰る

III-13.* ダマスカスに残ったムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、生き残った不信心者と戦うが、岩山に閉じ込められ、長い眠りにつく

IV. 最後の時代と終末（第6巻初め～第7巻終わり）

IV-1. ダジャールの出現

IV-2. ムハンマド・アリ・ハナフィーヤの目覚め

IV-3. ムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、イマーム・マフディとなる

IV-4. イマーム・マフディとダジャールの戦い

IV-5. イーサの降臨、ダジャールの退治

IV-6. イーサ統治下の満ち足りた時代

IV-7. ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとイーサの死後、怪物が跳梁し、人々が苦しむ

IV-8. 終末の到来。

IV-9.* 最後の審判とこの世の終わり

## 4.『バラプラガン』部分訳

先述のとおり、『バラプラガン』は、イスラーム学校学生や他のムスリム大衆に対し、イスラームの規範に反しない娯楽的読み物を提供すると同時に、イスラームを守るための武装抵抗運動の重要性を訴え、それに関する知識を与え、運動への共感を高めることを目的として刊行されたと考え

られる。では、『バラプラガン』では、どのような論理とことばを用いて武装抵抗の意義が語られているのだろうか。

『バラプラガン』の特徴のひとつは、イスラームを守るために戦って死んだ殉教者に対して神が与える報いが強調されていることにある。特にIは全体がその説明にあてられており、II-7-eでも輝く雲に乗った預言者や、天使や天女がカルバラの殉教者を迎えに来る様子が具体的に描かれている。これらの部分が、人々の士気を鼓舞し、彼らが戦いに生命や財産を捧げることを奨励するという機能を持つことは否定できない。

確かに、来世における報いを強調することには、死を覚悟して戦いに参加する人の恐怖感を和らげ、同時に、その死に栄光を与え、社会的なものにするという機能があるであろう。だが、それだけで武装闘争への一般の人々の共感や支持、参加を獲得することができるとは考えにくい。武装闘争は、生命という最大の犠牲を参加者に強いるものであり、それに広範な人々を動員しようとするからには、来世における戦死者個人の救済や、その親族の名誉について語るだけでは不十分であり、より積極的に、包括的で一貫性のある社会秩序観　―現世における社会秩序のあり方を示すとともに、来世における報償の観念もその一部とする社会秩序観―　を示し、それにもとづく社会変革のパラダイムを提示する必要があると思われる。そして、その社会秩序観とそれにもとづく変革のパラダイムは、特定の時代と地域を生きる人々の歴史的経験と日常生活を通じて形成される社会認識と接点を持つものでなければ説得力を持たないことであろう[(9)]。このような観点から、本稿後半では、『バラプラガン』のテキストの中の、この世における社会秩序のあり方について述べている部分を用いて、その社会秩序観を検討する。

本節では、その最初のステップとして、『バラプラガン』の中から2箇所を選んで訳出する。一番目は、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤがヤジード軍に対して1回目の勝利を治め、マディーナに入城し、この町を治める部分である（構成III-4、訳文①）。二番目は、ヤジード軍に完全に勝利したムハンマド・アリ・ハナフィーヤがザイナル・アビディンを救出し、ムスリムの指導者に就任させ、彼を補佐してダマスカスを統治する部分である（構成III-11、訳文②）。

翻訳にあたっては、資料としての性格上、できるだけ原文に忠実に訳

し、必要に応じて< >内にマラナオ語の原語をローマ字で記した[10]。直訳では意味が通じにくい部分は[ ]で補った。ジャウィ綴り原文には句読点や段落分けはほとんどないが、訳文では、内容の理解を助けるために、適宜、句読点を付し、段落に分けた。

【訳文①：ムハンマド･アリ・ハナフィーヤのマディーナの統治】[*Baraperangan*. Vol.4, pp.27-29]

マディーナの指導者たち<manga dato>は彼ら[ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとその兄弟や従者]を出迎え、握手した。彼らはムハンマド・アリ・ハナフィーヤを褒め讃えた。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、マディーナの指導者が欲するものを彼らに与えた。兄弟一行はイブラヒムの聖所<maqam o Ibrahim>に入り、アッラーの使徒の墓に着いた。マディーナの指導者たちが、アッラーの使徒[の時代に、彼]から享受した慣行<asal>について話すのを聞いて、彼らは泣いた。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは言った。「兄弟たちよ、アッラーの使徒の孫たち[の死]に対して復讐しよう。もし我々がそれを忘れたら、我々は彼らから復讐を受けるだろう。」彼らはそれぞれの天幕に帰った。

金曜日がやってきた。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤと兄弟たちはモスクに入った。彼らは、マディーナのすべての人々とともに集団礼拝を行なった。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは[説教壇に]登り、フトバ[説教]を述べた。彼は第一に、至高なるアッラーと、アッラーの使徒と、彼の四人の教友を賞賛した。そのあと、彼はアミール・ハサン<Amir Hasan>とアミール・フサイン<Amir Husain>の戦いについて語り、彼らを賞賛した。マディーナの人々は言った。「本当に、私たちは長い間、アミール・ハサンとアミール・フサインへの賛辞を聞かなかった。」

それが終わった後、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは言った。「私に従う人々よ、ヤジード王<Raja Yazid>によって破壊された橋やモスクや家屋を修復しなさい。」

それが済むと、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、マディーナのくにに、イスラームの裁き<hokoman o Islam>にもとづく統治を確

立した。

【訳文②：ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとザイナル・アビディンのダマスカス統治】[*Baraperangan*. Vol.5, pp.35-39]

それ [ザイナル・アビディンの即位式] が終わったあと、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、ヤジードの宝庫<baitulmal>を開けさせた。彼はたくさんの金銀宝石を見つけ、それを兄弟たち、すべてのリーダー<dato>、指揮官<holobalang>、人民<raayat>に分け与えた。そして、すべての宗教指導者<pandita>、すべての物乞い<fakir>と貧者<miskin>、ウラマーにザカート[義務としての喜捨]やサダカ[自発的な喜捨]を与えた。

誰もがザイナル・アビディンが長生きし、彼の権力<kabesaran>がさらに強まり、彼が現世と来世において災いから免れるようにと至高なるアッラーに祈願した。ザイナル・アビディンは指導者<dato>になった。

それから長いときが経ち、ある日、[ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとその]兄弟たちが集まった。ザイナル・アビディンはムハンマド・アリ・ハナフィーヤに向かって言った。「私は兄弟[従兄弟]のハリスとカプ・ムシブに大臣になってもらい、私の統治を補佐してくれるように頼みたいと思います。」ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは言った。「それはよいことです。でも、叔父さんたちの許しをもらいなさい。あなたが許しを求めれば、きっと彼らは喜ぶでしょう。」

それを聞いたイブラヒム・マストルとムシブ・カプは言った。「アミール・アルムーミニーン[信徒たちの長]、なぜ私たちのことを気にかけるのですか。もしかりに私たちに10人の子供がいたとしても、私たちは喜んであなたに差し出すことでしょう。」それを聞いたザイナル・アビディンは喜んだ。彼は指導者<dato>の子どもにふさわしい[立派な]衣服を与えた。こうしてハリス、カプ・ムシブの二人の兄弟[従兄弟]は、ザイナル・アビディンの大臣となった。

ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、ダマスカスのくにの、すべての人民と指揮官に告げた。「ハリスとカプ・ムシブの意向に従いなさい。なぜなら、あなた方はそれを通じてザイナル・アビディンの意向

を知ることができるからです。」イブラヒム・マストルとムシブ・カプは彼らの息子二人が大きな権力を与えられたことを聞いて喜んだ。

そのあと、ムハンマド・アリ・ハナイフィーヤは、彼らの砦と、くに中のすべての破壊された[施設]とモスクと橋の修復を命じた。それが終わると、ダマスカスは以前の状態に復旧した。すぐに、避難していたすべての人々がダマスカスに戻ってきた。ザイナル・アビディンは、聖典の裁きに基づく公正な統治<kadato a adil a hokoman a kitab>を行なってくにを治めたので、「ダマスカスは復興した<mipaegompiya>」と[いう知らせが]すべてのくにぐにに届いた。遠くからも近くからも、すべての商人たちが昼も夜もやってきた。[そのため、]すべての商品や食品の値段が下がった。

ある日のこと、[ムハンマド・アリ・ハナフィーヤの]すべての兄弟、すべての指揮官、すべての兵が集まり、金曜礼拝を行なった。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤはザイナル・アビディンを褒め讃えさせた。こうしてダマスカスは、ザイナル・アビディンの統治の下、快適なところとなった。兄弟たちは統治の決まり<hokoman a kandato>についてザイナル・アビディンに助言を与えた。すべての指揮官と兵を公正なやりかたで統制し<parintaan a adil>、すべての貧者、物乞いや、ダマスカスにやってくるすべての人々に生活の糧を与えることに関して、彼らはハリスとカプ・ムシブに助言を与えた。

ザイナル・アビディンの統治が長く続いたので、「ダマスカスはヤジード王の治世のころよりもずっと評判がよくなった」という噂が様々なくにぐにに伝わった。様々なくにぐにのリーダーは恭順の意を示し、いろいろな布を送り届けてきた。それらは、「娘の目の布<saklat a ain al-banat>」、「バラダウの絹<sotra a baladaw>」、「カフィパトの絹<sotra a khafipat>」、「きらめきの絹<sotra a diwangga>」と名づけられたものだった。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤと兄弟たちはたいそう喜んだ。

ザイナル・アビディンは彼ら皆をもてなした。また、彼は、金銀のほか、リーダー<dato>にはリーダー[の身分]にふさわしい衣装<manga nditaren o dato a adat o manga dato>、指揮官には指揮官[の身分]にふさわしい衣装、兵には兵[の身分]にふさわしい衣装を与

えた。様々なリーダーは皆、ザイナル・アビディンが非常に公正な統治を実践している<tanto a adil a kandadato o Zainal Abidin>のを見て、ザイナル・アビディンを愛した。彼らは、彼の統治が子々孫々まで続くようにと至高なるアッラーに祈願した。

## 5.『バラプラガン』の社会秩序観

ここでは、『バラプラガン』のテキストにもとづいて、そこに描かれた社会秩序の観念を検討する。まず、訳文①の、「マディーナの指導者たちがアッラーの使徒から享受した慣行について話し、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤらが泣く」という部分には、預言者ムハンマドの時代のマディーナが理想的な社会であり、それが失われていたという見方が示されている。戦乱で荒れ果てたマディーナに入ったムハンマド・アリ・ハナフィーヤが行なったのは、公共施設や家を修復し、イスラームの定めにもとづく統治を確立することであった。ここから、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤが預言者ムハンマドの時代の社会秩序を復興し、理想的な社会を建設する者として描かれていることがわかる。

「イスラームの裁きにもとづく社会の建設者」としてのムハンマド・アリ・ハナフィーヤのイメージは、ダマスカスの統治についての部分にも見出される。ここでは、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとザイナル・アビディンのダマスカスで実践した理想的な統治について、「聖典の裁きに基づいた公正な統治」、「非常に公正な統治」ということばが用いられている。「聖典の裁き」の中の「聖典<kitab>」はクルアーンをさすので、「聖典の裁き」は「イスラームの裁き<hokoman o Islam>」と同義と考えてよい。「聖典の裁きに基づいた公正な統治」とい表現から、「イスラームの裁きに基づく統治」はすなわち、「公正な統治<kadato a adil>」であると考えられていることがわかる。「公正<adil>」ということばは、指揮官と兵の統制の仕方について述べた部分にも用いられており、このことから「公正さ」がイスラームの規範に基づく理想的な統治の本質を示す重要な観念であることがうかがわれる。

では、「公正な統治」とは、どのような統治なのだろうか。『バラプラガン』からは、統治者の個人的資質が、公正な統治の実現にとって必要不可欠な要件であるという考え方を読みとることができる。個人的資質とは、

具体的には、尊い血筋を引くことと、敬虔な人物であることをさす。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、バギンダ・アリの息子であり、ザイナル・アビディンはバギンダ・アリの孫にあたる。特に預言者ムハンマドの男子直系の曾孫ザイナル・アビディンは、他の指導者とは格段に社会的威信の高い人物として描かれている。ダマスカスで、すべてのムスリムの長の地位に就任したのは、長年の戦いで優れたリーダーシップを発揮し、年長でもあるムハンマド・アリ・ハナフィーヤではなく、甥のザイナル・アビディンであった[11]。ここには、統治者の要件として、尊い血筋 ―具体的には特にバギンダ・アリの血筋― が重要であるという考え方が反映されている。

それに加えて、よい統治者は敬虔な人物として描かれている。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、圧政者、不信心者からムスリムを守るために果敢に戦うと同時に、危機に瀕して万策尽きたときには、潔くすべてをアッラーの意向の任せ、平静な心を保つ(III-8-c)。ダマスカスでのムハンマド・アリ・ハナフィーヤとザイナル・アビディンは、富を独り占めせず、従者や人民に惜しみなく分け与え、イスラーム指導者や貧者にも喜捨を与える。これらは、イスラームの規範に合致する行動として解釈することができる。

一方、バギンダ・アリ子孫一族の宿敵であるヤジードは、これと対照的に、イスラームの規範に反する行動をとる極悪人として描かれている。ヤジードは、陰謀によって預言者ムハンマドの孫たちを殺して政治権力を掌握したが、これは尊い血筋の人物による統治という観念に反すると同時に、イスラームの規範に反する行為である。彼の行動の原因は、彼がアッラーの教えを自分の都合で捻じ曲げ、誤った信仰に変えてしまったことであると説明されている。ヤジードが戦いで窮地に陥ったとき、彼の二人の息子は、「こんなことになったのは、お父さんが信仰告白のことばを、「アッラーのほかに神はなく、ヤジードはアッラーに愛される者である」に勝手に変えてしまったからです。アッラーはそれを受け入れなかったのです。」と非難する（III-8-a)。それに耳を貸さなかったヤジードは戦いに敗れ、アッラーによって遣わされたフサインの魂に追い詰められ、地獄の炎を連想させる炎の泉に落ちて死んでしまう（III-8-g)。ヤジードに対しては、「圧政者」、「不信心者」、「地獄行きの者」というイスラームの観点か

らみて最も強い批判を示す呼称が用いられているが、そこには、ヤジードがアッラーの名を用いて偽の教えを騙ったという批判が込められていると考えられる。

また、「公正な統治」は、優れた資質を持つ指導者によって行なわれるが、個人独裁とは異なり、側近や大臣の助言を広く取り入れて実践されるものであるという考え方を読みとることができる。ザイナル・アビディンは、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとその兄弟や大臣の助言と補佐を受けて善政を行なうが、ここにはこのような観念が表されている。

もうひとつの特徴は、身分秩序に関するものである。ザイナル・アビディンの統治下、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは民衆に対し、ザイナル・アビディンと大臣に従順に従うことを命じている。ここには、民衆とは、優れた資質を持つ指導者に導かれ、その統治に従順に従うものである、という民衆観が表現されている。そこには、民衆自身の主体性に価値を認める考え方はみられない。先述のとおり、貧者に対する喜捨に言及した部分もみられるが、それもムスリムの義務、責務という概念で説明できるものであり、貧者の人間性や主体性を示す叙述は物語り全体を通じて不在である。

物語の中の社会には、明確な身分秩序があり、各身分　―統治者、側近、地方首長、指揮官、兵、人民、貧者など―　は、それぞれの身分に応じた社会的威信与を持ち、そこには歴然とした格差がある。この格差は、それぞれにふさわしい服装によって社会的に確認されている。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤやザイナル・アビディンは、そのような身分社会の最上層に属しており、身分社会の秩序やそのしきたりを遵守して行動している。従って、『バラプラガン』の中の「公正な統治」、「イスラームの裁きに基づく統治」という観念は、身分秩序の観念と対立しないものであり、社会経済的な面での個人間の不平等を容認する観念といえる。

一方、イスラームの規範に基づいた「公正な統治」は、経済活動を活性化させ、経済的繁栄をもたらし、それによって民衆の生活に安定をもたらす、という考え方もみられる。ザイナル・アビディンの統治により、ダマスカスが復興し、商人が押し寄せ、物価が安くなるという部分に、そのような観念を読みとるができる。ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、マディーナとダマスカスでの双方で、他の公共施設と並んで、橋の修復を命

じている。橋は経済活動にとって重要な施設であり、この点からも、「公正な統治」が経済活動の活発化と結びつくものとしてとらえられていることが読みとれる。

すでに述べたように、1960年代末から1970年代初めにかけて、ミンダナオ中部では、イラガによる虐殺事件やそれに対する報復が頻発し、多くの避難民が発生していた。特に内陸部高地にあるラナオ湖周辺地帯では、治安の悪化のために海岸部との物資の輸送や交通に支障が生じ、経済活動が停滞し、人々は物価高等に苦しんでいた。こうした状況の中で『バラプラガン』に接した人々は、ヤジード王統治下の荒廃した社会を、マルコス政権下の地域社会の窮状を重ね合わせ、敬虔な指導者に導かれる「公正な統治」と、それがもたらす日常生活の安定と経済的繁栄に、自分たちの希望を重ね合わせていた可能性がある。

また、『バラプラガン』に描かれる身分社会秩序は、マラナオ社会の伝統的な身分社会秩序と共通の要素を持つので、読み手は7世紀のアラブ世界を舞台とする物語を、自分たちにとって身近な物語として読むことができたのかもしれない。

ここに描かれた「公正な統治」、「イスラームの裁きに基づく統治」ということばやその内容は、マレー語底本に本来存在し、翻訳者はそれを忠実に訳しただけなのか、あるいは、翻訳者が当時のミンダナオ・ムスリム社会を映し出すために加筆したものなのだろうか。マレー語底本が見つかっていないので、この点は不明である。だが、この問題に示唆を与えてくれる資料として、ブラケルが編集した『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』のテキスト[Brakel 1975a]がある。これは、ブラケルが、『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』の複数のテキストを比較検討し、その原型と思われるものを再構成したものであり、[Brakel 1975b]はその注釈書である。次節では、このブラケル版マレー語テキストの中の、本稿で訳出した二つの場面に相当する部分を検討し、マラナオ語版テキストとの比較を試みる。

## 6. マレー語『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』テキストとの比較

まず、マディーナの統治に関する部分を訳出する。<　>内はマレー語の原語を示す。

【マレー語テキスト訳文①：ムハンマド・ハナフィーヤのマディーナで統治】[Brakel 1975: 236-237]

礼拝を終えた後、ムハンマド・ハナフィーヤは喜んで楽器を打ち鳴らすように命じた。そのあと、マディーナのくにの有力者<orang kaya-kaya>がうちそろってムハンマド・ハナフィーヤとその兄弟を訪ねた。それが済んだ後、ムハンマド・ハナフィーヤは、人々に破壊されたモスクの修復を命じ、欠陥のある<tiada baik>すべての砦<kota>を改修させた。それが済むと、マディーナのくには、ムハンマド・ハナフィーヤによって、極めて堅固に統治された。<terlalu keras dihukumkannya> 。

マレー語テキストでは、ムハンマド・ハナフィーヤが修復を命じたのはモスクと砦なのに対し、マラナオ語テキストでは、モスクに加えて、日常生活や経済生活に重要な橋と家屋が含まれている。いつごろ、どこで変更が加えられたかを確かめるすべは今のところないが、この変更は、物語を1970年代前後のミンダナオのムスリム民衆にとってより身近に感じられるものにするという効果をもたらしている。

両者のもうひとつの違いは、マレー語テキストでは、単にムハンマド・アリ・ハナフィーヤが堅固に統治したと述べられているだけなのに対し、マラナオ語テキストでは、「イスラームの裁きにもとづく統治」ということばが用いられている点である。フィリピンのイスラーム指導者は、米国統治期以来、イスラーム法の実践の権利を求めて請願などの活動を行なっており、特に1960年代末には、ラナオ地方出身中東留学ウラマーを含むムスリムのグループが、ムスリムに対するイスラーム法の適用を求めて活発に言論活動を行なっていた[川島1996]。この点を考えると、翻訳者が同時代のイスラーム法実践要求を念頭において、「イスラームの裁きにもとづく統治」ということばを用いた可能性が考えられる。もちろん、底本でもそれに相当することばが用いられていた可能性も捨てきれない。ここで重要なのは、いずれの場合にせよ、1969年のミンダナオ島ラナオ地方において、大衆向け文学の中でこのことばが用いられたという点である。このことは、当時のラナオ地方ムスリム社会において、「イスラームの裁きにもとづく統治」ということばが、理想的な統治を意味するという共通の

了解が成立していたことを示唆している。

次に、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤとザイナル・アビディンのダマスカス統治について述べた部分のマレー語テキスト2点を順にみてみよう。

【マレー語テキスト訳文②-a：ザイナル・アビディンのダマスカス統治】[Brakel 1975a: 264]

> その後、金曜日のこと、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、すべての町でザイナル・アビディンの名前でフトバを読み上げさせた。その後、ザイナル・アビディンは、叔父のムハンマド・アリ・ハナフィーヤ、そのすべての兄弟たち、すべての親戚、すべての指揮官と兵士、それらすべての人々の前で玉座に着き、ずっと統治を続けた。

マラナオ語テキストが、ザイナル・アビディンの統治について詳しく述べているのに対し、このマレー語テキストは非常に短く、統治の内容には全く言及していない。

【マレー語テキスト訳文②-b：ザイナル・アビディンのダマスカス統治】[Brakel 1975b：Ⅱ21、280]

（途中より）

それが済むと、ザイナル・アビディン王<raja Zainal Abidin>は完全に王位についた<kerajaan>。そして、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤは、人々にヤジードの宝庫<perbendaharaan>を開くように命じ、金銀やさまざまな宝石を取り出し、物乞い<fakir>と貧者<miskin>に与えた。それからは、ダマスカスのくにのすべての物乞いと貧者は豊かになり、哀れな者はひとりもいなくなった。すべての人が楽しげに座した。

②-bでは、ザイナル・アビディンが信者の長に就任したこと、ヤジードの財宝を貧者に分け与えたことが述べられており、この点はマラナオ語テキストと共通する。だが、マラナオ語テキストにみられるダマスカスの復興と繁栄の描写は欠けている。全体として、マラナオ語テキストの方が統治の描写が豊富であり、理想的な統治の実態を具体的に伝えるものになっ

ている。

## おわりに

以上、マラナオ語物語『バラプラガン』を紹介し、そこに描かれた社会秩序観念を検討した。その結果、理想的な社会秩序のあり方は、「イスラームの裁きにもとづく統治」、「公正な統治」という概念で表現されていることが明らかになった。そして、物語の文脈における「公正」という観念は、客観的な不平等の現実を許容する観念であることがわかった。これらの観念は、フィリピンのイスラーム政治思想の中で、どのように位置付けられるのだろうか。それ以前の時期や、現在のさまざまな政治運動や、それを支える思想とどのような関連をもっているのだろうか。これらの点を解明するのは、今後の課題である。

従来の研究では、筆者自身によるものを含め、1960年代以降、フィリピンのイスラーム運動やモロ民族解放運動において、中東留学ウラマーが新しい思想や運動を故郷に持ち帰って広め、重要な役割を果たしてきたことが指摘され、この点に関心が注がれてきた。本研究により、運動の末端では、民衆の精神世界により近い所に位置していた現地教育ウラマーが、これらの運動において重要な役割を果たしていたことが示された。彼らは、母語による大衆向け出版物を通じ、民衆に親しまれていた物語の認識枠組みを用いつつ、そこに近代的なイスラーム法実践要求運動の要素を加え、それによって同時代に生きる人々の心をつかみ、「イスラームの裁きにもとづく公正な統治」を実現するための武装闘争の意義を訴えようとしたのではないかと考えられる。

ここで誤解を避けるために付け加えておくが、筆者は、「現地教育ウラマーの存在が、急進的イスラーム政治運動の原因であり、解決すべき問題である」と主張しているのではない。『バラプラガン』の中の圧政者による尊厳の剥奪、それに対する武装抵抗の正当性の主張、理想的な世の中としての「イスラームにもとづく公正な社会」のイメージが、1970年前後のラナオ地方のムスリム民衆の心に強く訴えかけたのだとすれば、その最大の原因は、それを自分たち自身の問題と感じさせてしまうような当時のラナオ地方ムスリム社会の状況にある。不公正、尊厳の剥奪、圧政という抽象

的観念を、日常生活の中で広範な人々が具体的な行為を通じて実感せざるを得ないという現実こそが、急進的イスラーム政治運動が民衆に支持される原因なのである。

本稿で検討したのは、『バラプラガン』の中の社会秩序観のみであった。ミンダナオにおける、草の根レベルでのイスラーム政治思想をより深く理解するためには、より包括的に、社会秩序の変革にかかわる様々な観念を検討する必要がある。本稿で明らかにされたことを出発点とし、今後は、これらの点を探求していきたい。

（謝辞）

『バラプラガン』の翻字、翻訳に関しては、Usman Imam、Elizabeth Imam、Labi Riwarungの各氏から、また、[Brakel 1975a] [Brakel 1975b]のなかの本稿引用部分和訳に関しては、菅原由美氏（東京外国語大学COEフェロー）から貴重な助言をいただいた。ただし、本稿の欠点に関する責任はすべて筆者個人にある。なお、ミンダナオ島南ラナオ州での現地調査は、文部省科学研究費基盤研究C「20世紀南部フィリピンのイスラーム運動」（平成13－15年、代表：川島緑）、および、同「現代イスラーム地域における民衆と宗教運動の総合的研究」（平成14－16年度、代表：私市正年）の活動の一部として実施した。調査においては、現地の学術機関やイスラーム学校関係者をはじめとして、多くの方々に大変お世話になった。これらの方々に深く感謝します。

＜主なインタビューの対象者と時期、場所＞（敬称略）

| | |
|---|---|
| Masla Abdulgani | 2003年12月6日、同10日、2004年9月2日（南ラナオ州マラウィ市） |
| Abdulhalim Ambloto | 2004年9月5日（南ラナオ州マラウィ市） |
| Anwar Bashier | 2004年9月3日（南ラナオ州マラウィ市） |
| Kargan Analo Pumbaya | 2004年9月7日（南ラナオ州ビニダヤン町） |
| Usman Imam | 2004年9月1日（南ラナオ州マラウィ市） |

注

(1)　モロ民族解放運動とその思想にしては、[Majul 1985] [Vitug and Glenda 2000] [川島1993 ][Che Man 1990]参照。

(2)　マラナオ語では物語はトトル(totoel)と呼ばれる。イスラームに関連する物語は、特にキサ(kisa)と呼ばれる。これはアラビア語起源のことばである。本稿で扱うバラプラガンは、トトルであり、キサでもある。

(3)　狭義にはマレー語のアラビア文字表記、広義には東南アジアのオーストロネシア語系言語のアラビア文字表記をさす。ジャウィ表記については、[上智アジア学2002] [川島2004b]参照。

(4)　マラナオ語の語根perangに、接辞bara- と-anを付け、抽象化された概念を示す。perangは「プラン・サビルッラー(perang sabilullah)」の後半部分が省略されたもの。perangはマレー語で「戦い」、sabilullahはアラビア語で「アッラーの道に即する」をそれぞれ意味し、全体として「アッラーの道に則した戦い」を意味する。この表現はマレー語圏で広く用いられているおり、マラナオ語でも同じ意味で用いられている。

(5)　バラプラガンの主人公、ムハンマド・アリ・ハナフィーヤに相当するのは、第４代カリフ、アリーとハニーファ族の女性との間に生まれたムハンマド・ブン・アルハナフィーヤ（638年生、700/701年没）。685年、シーア派の中の一派、カイサーン派のムフタールは彼を奉じて反乱を起こした。ムハンマド・ブン・ハナフィーヤ自身は、この反乱において積極的な役割を果たしたわけではなく、晩年は政治にかかわりをもたなかった。しかし、カイサーン派の一部は、ムハンマド・ブン・アルハナフィーヤは、イマーム・マフディとして地上に再臨すると説いた（[嶋田2002：124][Brakel 1975a: 2-3]）。

(6)　バラプラガンの語りは戦いの時代に特に盛んになったとはいえ、それ以外の時代にも、日常の娯楽として行われた。現在50歳代の人々がこどもだった1960年代頃までは、仕事のない夜など、物語の上手な祖父母や近所の人にせがんで、家でバラプラガンを聞かせてもらい、楽しむことがあったという。

(7)　このうち、最終巻の第７巻は現物が確認されていないが、他の巻は、

マラウィ市にあるダンサラン学院ピーター・ガウィン記念研究センター図書館に保存されており、筆者もこれを用いて研究を行った。筆記されたバラプラガンがいつ初めて登場したのかは不明である。1950年代にマラナオ語アラビア文字表記のバラプラガンの本を見たことがあるという情報もあるが、現物は確認できていない。

(8) １－５巻は同学院学籍係、教員組合会長（1972年時点）のアブドルハリム・アンブロト・プンギナギナ(Abdulhalim Ambloto Penginagina)氏が筆写し、第６巻は同学院を卒業して、近隣のバヤン町のイスラーム学院で教鞭をとっていたグロ・サ・バヤン(Guro sa Bayang)氏が筆写した（付録参照）。翻訳者がだれであったかについては、カーミロル・イスラーム学院院長、ムハンマド・シディク氏という説（アブドルハリム氏）と、他の人物と言う説（アブドルガニ氏）があり、事実関係は解明できていない。マレー語底本の所在も不明である。

(9) この点に関しては、[Ileto 1979] [池端1987][弘末1994]に示されている考え方を参考にした。

(10) マラナオ語のローマ字表記は、マラナオ語＝英語の標準的辞書、[McKaughan and Macaraya 1996]で用いられている方式を用いた。イスラーム関連の用語については、現代のマラナオ社会で一般的に用いられている表記方法を用いた場合もある。

(11) 彼は側近から「信徒たちの長(amir al-muminin)」と呼ばれている。この用語は、第２代カリフ、ウマル以来、カリフに対する呼称として用いられたものであり、ザイナル・アビディンがカリフに相当するムスリム集団全体の長に就任したことを示唆している。

## 文献目録

Brakel, L. F. 1975a, *The Hikayat Muhammad Hanafiyyah: A Medieval Muslim-Malay Romance,* The Hague: Martinus Nijhoff.

——、1975b, *The Hikayat Muhammad Hanafiyyah: Apparatus Criticus to the Text Edition,* Leiden.

Che Man, W. K. 1990, *Muslim Separatism: The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand,* Singapore: Oxford University Press.

George, T. J. S. 1980. *Revolt in Mindanao: The Rise of Islam in Philippine Politics,* Kuala Lumpur: Oxford University Press.

弘末雅士、1994、「インドネシアの民衆宗教と反植民地主義」、『変わる東南アジア史像』、山川出版社、261-284頁。

池端雪浦、1987、『フィリピン革命とカトリシズム』、勁草書房。

Ileto, Reynaldo C. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Phlippines, 1840-1910.* Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

『上智アジア学』、2002、第20号（特集：ジャウィ文書研究の可能性）。

川島緑、1989、「フィリピンにおける国民統合体制の成立：1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に」、『アジア研究』第36巻1号、41-88頁。

——、1993、「戦後フィリピンにおけるイスラーム団体の発展—モロ国民主義に先行する政治的潮流—」、『アジア研究』第39巻４号、85-130頁。

——、1996、「マイノリティとイスラーム主義—フィリピンにおけるムスリム身分法制定をめぐって」、『「イスラム原理主義」とは何か』（山内昌之編）、岩波書店、185-206頁。

——、2003、「南部フィリピンの紛争と市民社会の平和運動—2000年の民間人虐殺事件をめぐって」、『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって』、（武内進一編）、アジア経済研究所、409-449頁。

——、2004a、「1930年代フィリピン、ラナオ州におけるイスラーム改革運動：カーミロル・イスラーム協会設立をめぐって」、『東南アジアにとって20世紀とは何か：ナショナリズムをめぐる思想状況』、（根本敬編）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、229-254頁。

——、2004b、「南部フィリピン・イスラーム地域のジャウィ史料」、『世界

史の研究』200号、49-55頁。

------、2004c、「二人の若者の旅―ウスマン・イマーム氏講演解説」、『上智アジア学』第22号。

McKaughan, Howard P. and Batua Al-Macaraya, 1996, *A Maranao Dictionary.* Manila: De La Salle University Press.

Majul, Cesar Adib, 1985, *Contemporary Muslim Movement in the Philippines.* Berkeley: Mizan Press.

嶋田襄平、2002、「イマーム」、『新イスラム事典』、平凡社、124頁。

Vitug, Marites D. and Glenda M. Gloria. 2000, *Under the Crescent Moon: Rebellion in Mindanao,* Quezon City: Ateneo Center for Social Policy and Public Affairs.

## 付録：バラプラガンの書誌データ

タイトル：　Baraperangan, Muhammad Ali Ha[na]fiya　（全7巻）
大きさ：　縦約18cm、横約11cm
印刷方法：　謄写版印刷
言語：　マラナオ語
文字：　アラビア文字表記（ジャウィ表記）

第１巻
刊行時期：　イスラーム暦1392年第６月９日＜西暦1972年６月21日相当＞
筆記者：　ウスタード・カーディー・アブドルハリム・プンギナギナ（Ustad Qadi Abdulhalim Penginagina）、カーミロル・イスラーム教員連合会長、カーミロル・イスラーム・宗教・アラブ学院学籍係
ページ数：　38pp.

第２巻
刊行時期：　イスラーム暦1389年＜1388年の誤りの可能性あり＞第11月日曜に書写完了。
西暦1969年１月21日
筆記者：　カーディー・プンギナギナ・アンブロト(Qadi Penginagina Ambloto)。ソオド、マラウィ市。
ページ数：　44pp.

第３巻
刊行時期：　イスラーム暦1388年。＜1968年３月31日～1969年３月８日の期間に相当＞
筆記者：　カーディー・ハジ・アブドルハリム（Qadi Hajj Abdulhalim）
ページ数：　44pp.

第４巻
刊行時期：　イスラーム暦1388年12月25日、西暦1969年３月15日。

筆記者：　不明
ページ数：　44pp.

第 5 巻
刊行時期：　最終ページ落丁のため不明。
筆記者：　最終ページ落丁のため不明。
ページ数：　40pp.（最後数ページ落丁。）

第 6 巻
刊行時期：　イスラーム暦1391年第 4 月 7 日＜西暦1971年 6 月 2 日に相当＞
筆記者：　グロ・アリム・サ・バヤン（Guro Alim sa Bayang）
ページ数：　44pp.

第 7 巻　（現物未確認）